

起動動詞 *get, fall, set* に後続する統語形式 *to V, Ving, to Ving* 及び補文動詞の選択

藏 菌 和 也
(関西学院大学大学院)

1. はじめに

起動動詞 *get, fall, set* が歴史的には *to V, Ving, to Ving* の3パターンを後続させていたことが Brinton (1988) に記述されているが、現代英語の振る舞いを記述する英英辞書では(1)のような統語パターンに限って記述されている。(以降、太線・下線は筆者による。)

- (1) a. How did you get to be a belly dancer? (*CALD*²)
 b. It's time you got cracking on that assignment. (*MED*²)
 c. We got to talking about old friends from school. (*LAAD*²)
 d. When she had departed, they fell to fighting among themselves. (*COB*²)

この起動動詞が *to V, Ving, to Ving* のいずれかを従えることで構成される起動表現は、表現ごとに補文で用いる動詞が異なり、特有のコロケーションを形成するが、ある起動表現において特定の補文動詞が好んで用いられる理由を十分に説明する研究は見られない。そこで本稿では、一部の文献に記述が残る起動表現 *set to Ving* も対象に加え、(i) 現代英語において起動動詞 *get, fall, set* に後続する補文 *to V, Ving, to Ving* でどのような動詞が好んで用いられるか (ii) 統語形式及び補文動詞の選択に起動動詞 *get, fall, set* のどのような意味が関係しているか (iii) 補文 *to V, Ving, to Ving* がどのような意味機能及び関係性を持つかを意味的統語論の立場から明らかにする。

2. 先行研究

2.1 アスペクト研究

アスペクト研究で有名なのが、アスペクト的な意味に基づいて動詞の意味分類を行った Vendler (1967), Dowty (1991) らの研究である。これらの研究では、動詞及び動詞句を(2)のような4タイプに分類した。

- (2) a. State (例: *desire, contain, love*)
 b. Activity (例: *run, walk, play*)
 c. Accomplishment (例: *make a chair, build a house, paint a picture*)
 d. Achievement (例: *die, drop, realize*)

また、柏野 (1999; 2012) では Vendler (1976), Dowty (1991) らの動詞のアスペクト分類を基にしつつ、動詞句ではなく、動詞の語彙の意味に基づいた動詞のアスペクト分類を行っている。この分類では、(i) 状態動詞は (3a) のように基本的に命令形では使用されな

い、(ii) 継続動作動詞（以降、継続動詞と呼ぶ）は (3b) のように継続を表す副詞句と共起できる、(iii) 瞬間動作動詞（以降、瞬間動詞と呼ぶ）は (3c) のように時点を表す副詞句と共起できるという統語的なテストを用いて動詞の意味を分類している。そして、出来事を「開始」「途中」「終わり」というアスペクト的な意味に区分する方法を採用している。

- (3) a. *Know the answer (柏野 1999: 113)
 b. "I worked for him for nine years," she said. (柏野 1999: 116)
 c. At eight o'clock John finished his breakfast.

2.2 起動動詞研究

アスペクト研究の中でも起動動詞研究の歴史は古く、主に *begin* や *start* を中心に *to V*, *Ving* が後続する場合のアスペクト的な意味の違いに関する研究が行われてきた。その中でも、Freed (1979) では準備段階の有無の点から *begin to V* と *start to V* の意味的違いが主張された。準備段階とは「出来事が実際に開始される前の段階」のことを指し、*begin to V* は (4a) のように出来事そのものについて言及するのに対して、*start to V* は行為が行われる前の段階（準備段階）について言及するので (4b) のような行為の取消しが表現できると説明している。

- (4) a. Henry began to sneeze but quickly regained his composure **after sneezing only once**. (Freed 1979: 72)
 b. Henry started to sneeze but quickly regained his composure **without actually sneezing**. (Freed 1979: 71)

一方、Close (1962: 108) では、*come to V*, *begin to V* が準備段階と同義の「行為の前兆 (prelude)」を表すとされており、どの起動表現が準備段階を表すのかに関して意見が一致していない。また、本稿で対象とする *get*, *fall*, *set* を用いた起動表現に関しても、準備段階を表すかどうかについての議論は行われていない。

2.3 構文的意味の研究

2.3.1 構文の比較研究

起動動詞に後続する *to* 不定詞と動名詞の意味は「一般性 vs. 特殊性」(Jespersen 1940: 193) や「潜在性 vs. 実現性」(Bolinger 1968: 124)、さらに動名詞の「継続性」(Freed 1979: 73, 小西 (編) 1980: 121, 1494, 小西 (編) 2006: 166) や「叙実性」(Kiparsky and Kiparsky 1971: 347-348) などの意味的な違いから説明されてきたが、これらでは説明できない例もみられる。

- (5) a. He started to get mean (but thought better of it) (Bolinger 1968: 124)
 b. He started getting mean (so I got out of there).
 (6) a. That was the week Danny began to read Freud in German. (小西 (編) 1980: 121)
 b. "Tomorrow start looking for a good used machine," I said,

例えば、(5a) では *to* 不定詞が潜在的な行為を表すために行為の中断が表せると説明されているが、(6a) のように *to* 不定詞は既に開始した行為を表すこともできる。さらに (5b) では動名詞が実際の行為を表すと説明されているが、(6b) では行為を明日行うように命令しており、まだ行為は実現されていない。

2.3.2 *to V, Ving, to Ving* が持つ意味

前述したように、*to* 不定詞及び動名詞の一般性に関する議論が盛んに行われており、その一般化には少なからず *to* の意味や動名詞の意味が重要な役割を果たしている。

前置詞 *to* の持つ基本的な意味について Curme (1931: 493) は *to* の直後で示される出来事もしくは物への「移行 (movement)」の意味を持っており、*to* 不定詞についても同じく「移行」の意味を表すと主張している。この *to* の持つ移行の意味特性は、*start to V* の *to V* が、*to V* で表される出来事の実現を終点とする「移行」を表す目標指示子 (goal specifier) として機能するという Duffley (2012: 123-124) の主張にも影響を与えている。

また、Visser (1972: 1090) が前置詞 *to* に動名詞が後続する *to Ving* 表現についても、前置詞 *to* が「移行」の意味を保持していると主張している。

最後に、*get Ving* で用いられる現在分詞の性質については、Leech and Svartvik (1994: 73) が i) 進行中の行為 ii) 一時性 iii) 未完了性を表すと説明している。

2.4 各起動動詞に関する個別的研究

2.4.1 *get to V* に関する記述

まず、*get* に *to V* が後続する場合に表す意味について Hornby (1975: 108) は進行時制 (*be getting to V*) で *become* と同義となることや、単純過去時制で進展の末期もしくは最終段階 (a later, or the final, stage in a development) を表すこと、さらに *to V* で表す状態への到達段階を表すことを説明している。

また、補文動詞の選択について Wood (1967: 112-113) は *get to V* 構造は永続的な状態を表すため、永続的な状態を表す *own* を用いた (7a) は表現できるが、非永続的な行為を表す *buy* を用いた (7b) は非文であると説明している。その一方、小西 (編) (2006: 299) は (8) の例を挙げて *be, like* といった状態動詞を用いとだけ説明している。

(7) a. He finally got to own the business. (Wood 1967: 113)

b. *He finally got to buy the business.

(8) You'll like her once you get to know her. (LDCE⁹)

2.4.2 *get Ving* に関する記述

次に、*get Ving* が表す意味について Wood (1966: 112) は単なる活動の開始を表すのではなく、長い間継続する活動を表すという。また、Rudanko (1996: 60) のように文主語の意図的関与を含意するという研究や、小西 (編) (1980: 633) のように *Ving* で用いる動詞が *cracking, going, moving, working* など一部の動詞に限られるとする研究、さらに (9) のようにある出来事が起きるまでの経緯を尋ねる表現での使用を非文とする研究がみられた。

(9) *How did Carol get eating pizza? (Kimball 1973: 211)

2.4.3 *get to Ving, fall to Ving, set to Ving* に関する記述

次に、*get to* に動名詞が後続する場合について、Rudanko (1996: 60) は '*get around to*' もしくは '*almost accidentally drifted into*' に言い換えることが可能であると説明している。また、Poutsma (1929: 927) には *get to Ving* がアメリカでのみ普及しているという説明が見られ、古くから限られた地域で用いられている様子がうかがえる。

さらに、*fall to* に動名詞が後続する場合、Trotter (1949: 100) はある精神状態への無意識の移行を表し、動名詞 *dreaming, wondering, grieving* を用いるという。また、Hornby (1975: 111) は活動もしくは状態の開始を表し、文語で用いるとしている。

最後に、*set to Ving* について小西 (編) (1980: 1384) は何を始めたかを明示するために *set to* に名詞 (特に *work*) もしくは動名詞が後続する表現を用いると説明している。

2.5 先行研究の課題

先行研究について概観してみると、起動動詞のなかでも *get, fall, set* に *to V, Ving, to Ving* が後続する際には「準備段階」を表すのか、それとも「出来事そのもの」について言及するのかについては十分に検証されていない。

また、補文においてどのような補文動詞をとるのかに関する記述は見られるが、ある起動表現の補文において、特定の動詞が好んで選択される理由は説明されていない。

最後に、対象とする起動表現で用いられる *to V, Ving, to Ving* がどのような構文的な意味機能を持ち、それぞれがどのような関係にあるのかについて十分説明されていない。

3. コーパス調査

本節では、各起動表現の補文で用いられる傾向が強い動詞とその頻度の調査結果を提示する。本稿では、*get to V, get Ving* については BNC を用いて量的な調査を行った。その一方、BNC では用例数が少なく、補文で用いられる動詞の傾向が判断しにくかった *get to Ving, fall to Ving, set to Ving* に関しては、COCA を用いて補文動詞の傾向とその頻度を調査した。そしてその結果を表 1. に示した。

そして次に、各起動表現の補文でどのような意味的性質を持つ動詞が用いられる傾向が強いかを質的に調査した。その際、動詞の意味的性質を分類するために、柏野 (1999; 2012) の動詞 3 分類 ([1] 状態動詞 [2] 継続動詞 [3] 瞬間動詞) を基準にして補文動詞を意味ごとに分類したものが表 2. である。

この表 2. の中でも、特に *think, look* など、「状態動詞」と「継続動詞」の両方の意味を持ちうる動詞に関しては、共起する語との関係性からどちらの意味用法で用いられているかを調査し、その使用頻度の多い意味用法に基づいてリストに掲載している。

表 1. 各起動表現の補文でよく用いる動詞とその頻度⁴

表現 No.	<i>get to V</i>	<i>get V-ing</i>	<i>get to V-ing</i>	<i>fall to V-ing</i>	<i>set to V-ing</i>
1	know 442	go 279	think 191	talk 8	make 4
2	work 118	move 66	talk 132	think 5	gather 3
3	sleep 114	talk 62	wonder 38	wonder, discuss 4	※ 3 2(例)
4	be 59	crack 20	feel 28	laugh 3	※ 4 1(例)
5	like 21	come 17	look 12	※ 1 2(例)	/
6	understand 12	work 12	cry 9	※ 2 1(例)	
7	feel 9	chat 5	tell 8		
8	talk 6	run 5	laugh, make, chat 7		
9	love 4	plan 4	call 6		
10	realize (realize) 2	wash 3	be 5		

※ 1 にくる動詞 : create, argue, fight, examine, eat, quarrel, squabble, pick, tear.

※ 2 にくる動詞 : wreck, study, pass, muse, ...etc.

※ 3 にくる動詞 : carve, clean, wipe, rock.

※ 4 にくる動詞 : spin, play, put, work, ...etc.

表 2. 各起動表現でよく用いる補文動詞の性質調査

<i>get to V</i> (BNC) [1] <i>be, know, understand, like, feel, love, realize (realise)</i> . [2] <i>work, sleep, talk</i> .
<i>get V-ing</i> (BNC) [2] <i>move, talk, work, chat, run, plan, wash</i> . [3] <i>go, crack, come</i> .
<i>get to V-ing</i> (COCA) [2] <i>think, talk, wonder, feel, look, cry, tell, laugh, make, chat, call, be</i> .
<i>fall to V-ing</i> (COCA) [2] <i>talk, think, wonder, discuss, laugh, create, argue, fight, examine, eat, quarrel, squabble, pick, tear, ... etc.</i>
<i>set to V-ing</i> (COCA) [2] <i>make, gather, carve, clean, wipe, rock, spin, play, put, work, ...etc.</i>

※ [1], [2], [3] ではそれぞれ状態動詞、継続動詞、瞬間動詞をリストしている。

4. 各起動表現の意味的・統語的な特徴

4.1 準備段階と実現段階について

まず、各起動表現 *get to V, get V-ing, get to V-ing, fall to V-ing, set to V-ing* が表す意味と補文における動詞選択の要因について議論するために、これらの表現が準備段階について言及するのか、それとも出来事そのものについて言及するのかを検証する。それは「準備段階」において「ある特定の性質を持った変化」を表すことが、「補文で状態動詞を好んで用いる理由」と深く関係していることを主張するためである。

また、本稿では、前述の「出来事そのもの」が表される段階を「実現段階」と呼び、「ある行為もしくは状態が現実世界において実現された段階」と、「話し手もしくは書き手の精神世界において行為もしくは状態が実現された段階」を表すもの¹と定義する。そして、各起動表現が「実現段階」において「開始」「過程」「終わり」を表すかどうかという意味的な特徴についてもコーパスを用いて記述していく。

4.2 統語的・意味的な特徴

4.2.1 *get to V* の特徴

次に、*get to V* の統語的な特徴を確認すると、主に *to* 不定詞補文において状態動詞を用いる傾向が強く、さらにこの状態動詞には永続的な状態を表す動詞ではなく、一時的な状態を表す動詞が多く用いられている。また、(10a) のように *gradually* な

どの段階的な進展を表す副詞と共に共起して段階的な状態変化を表わすほかに、(10b) のような *It takes (time) to V...* 表現² で用いられること、さらに (10c) のようにある出来事に至った経緯について尋ねる表現 *How... get to be... ?* における使用が可能なことからも、*get to V* が準備段階における段階的な状態変化と *to* 不定詞で表わす出来事への到達の両方を意識した表現であることが確認できる。そして、継続動詞をとる (10d) の場合も、変化の過程を含意する表現 *It takes (time) to V...* で用いられることから、「寝る」という段階への段階的な状態変化を示唆している。

- (10) a. Over the next few weeks Avril and Peter, a Royal Mail executive, **gradually got to know** each other, but they remained just good friends. (BNC)
 b. **It'll take a while to get to know** everyone. (LDCE⁹)
 c. **'How did you get to be** a driver?' Jed shrugged. (BNC)
 d. It took Martin a long time to **get to sleep** and even when he did he turned and twisted (BNC)

4.2.2 *get V-ing* の特徴

前項に続いて、*get V-ing* の統語的な特徴を見てみると、まず目に付くのが補文で瞬間動詞 *go* の使用が圧倒的に多いことである。そして、*get going* が場所を表す表現と共に共起する例がほとんどみられないことから、具体的な場所への移動というよりも、行為の開始に焦点を当てた表現ではないかと推測される。実際に、助動詞 *have (has)* や副詞 *only just* と共に共起して「パーティーがちょうど今しがた始まった」という開始点を強調する文脈の (11a) を見ると、*get V-ing* が開始点を表わすという意味特徴が確認できる。

また、(11b) のように命令を表す表現 *had better* などとよく共起することからも、現在分詞が進行中の行為（もしくは継続的な行為）を表すという説明は *get V-ing* の場合には当てはまらず、実際には結果段階における行為の開始点に焦点を当てる表現であると考えられる。この特徴は継続動詞が用いられる場合にも当てはまることが、副詞 *just* と共に共起して、ちょうどパーティーで話し始めた様子を表す (11c) から確認できる。

さらに、*How... get to V... ?* ように経緯を問う表現は見られず、方法を問う表現 *How... get V-ing... ?* が (11d) の 1 例のみ見られることから、*get to V* は出来事の実現に至るまでの経緯を含意するが、*get V-ing* は含意しないと言える。

- (11) a. The party's **only just got going** and it's quiet up here, peaceful. Loosen up a little, Robyn. We could have some fun. (BNC)
 b. Maxim finished his coffee. **'I'd better get going.'** (BNC)
 c. He says: 'I met Kristy through an old boyfriend of hers. It was at a Superbowl party and we **just got talking**.' (BNC)
 d. ... unless their economies start growing like Topsy. **How can they get going?** The answer depends on how much of the slump is attributable to exceptional circumstances whose impact will fade, (BNC)

Rudanko (1996: 60) では、*get V-ing* が行為に対する主語の意図的な関与を示唆すると述べており、確かに文主語の意図的な行為を示唆する *Let's* と共起する (12a) のような例が典型的な例として見られた。しかし、*it* (= 映画) のような無生物主語をとる (12b) のような例も見られることから、意図的・非意図的の両方の解釈が可能であると考えられる。

- (12) a. 'You crazy man, I love that boat as much as you do.' Jeff slapped Guido amicably on the shoulder. 'And I'm going to help you find it. Come on,' he added. 'Let's get cracking!' (BNC)
- b. Annette said: 'It was really slick. A bit slow to start but when it got going it was outstanding.' (BNC)

4.2.3 *get to V-ing* の特徴

さらに、*get to V-ing* の補文動詞と統語的な特徴を見てみると、まず動詞 *think* と *talk* が主に補文で使われている。また、動詞 *think* に関して状態動詞としての使用例と継続動詞としての使用例³の使用頻度をそれぞれ確認すると、(13a) のように *think* に *that* 節が後続する型で状態動詞として使用される例が COCA で 20 例みられた。また、(13b,c) のように *think* に *about, of* が後続する型で継続動詞として使用される例が COCA でそれぞれ 6 例と 79 例ずつ見られ、継続動詞としての使用が多いという傾向が見られた。しかし、状態動詞としての使用もアメリカ英語では一般的に可能である。

- (13) a. I saw guys get blown to pieces -- lives ended, ruined. And I got to thinking that there are worse ways to end your life than dying. (COCA)
- b. Maybe all you have to do is get to thinking about a guy and his ticket's punched. (COCA)
- c. He said, 'If they expect to have the same level of Government services, yes.' And I got to thinking of things that we could do without. (COCA)

統語的な特徴として、(14a,b) のように段階的な変化を表す *the* 比較級 ... , *the* 比較級 ... の表現や副詞 *gradually* などと共起して、*V-ing* で表される出来事に至る前の準備段階における段階的な状態変化を表わすという特徴が見られた。また、(14c) では継続を表す副詞句 *for a while* と共起していることから、実現段階における行為の継続を表すという特徴も確認できる。

- (14) a. And **the longer** he's gone, **the more** I get to thinking he was right, (COCA)
- b. Reid's widow called them 'Bohemians'. '**Gradually** he got to drinking with his Bohemian friends,' she said, 'and soon this wasn't a home. (BNC)
- c. At first, we each thought that someone was playing a joke on us. It wasn't until we got to talking for a while that we figured out it was just an honest mistake. But we were really hitting it off and just kept on talking. (COCA)

これらのことから、*get to Ving* は段階的な状態変化を表すが、実現段階における行為の継続も表せ、行為の継続の意味が中心的意味としてよく使用されていると考えられる。

4.2.4 *fall to Ving* の特徴

次に、*fall to Ving* の特徴として、構文自体の使用頻度が前述の *get* の構文 3 パターンと比べても圧倒的に少ないことと、継続動詞の使用が多いことが挙げられる。実際に、動詞 *think* をみると、(15a) のように *about* を後続させる継続動詞としての使用が主で、*that* 節を後続させる状態動詞としての使用は (15b) の 1 例のみ見られた。

- (15) a. “I fell to thinking as I often do of late, **about** Heaven and its character...
Like Corot, I hope there will be painting there, but” (COCA)
- b. At that point, he invoked “alkali hydrosulfides” and other like occult terms, but I fell to thinking **that** a rare species of igneous rock and a rare species of terrestrial tubeworm would not be cohabiting by chance alone. (COCA)

さらに、動詞 *wonder* を補文で用いた用例全 5 例を見ると、依頼や精神的な状態の意味ではなく (16) のように *about*, *when* などと共に起してある事柄やある時点での出来事について考えるという動作 (*think about*) の意味で用いられる傾向が強いことがわかった。

- (16) a. With the first light of dawn, he fell to wondering drowsily just **when** it was that he had last seen his ten-year-old brother. (COCA)
- b. That way, the cat could be a part of Jing Yu's new life. And so she fell to wondering about Jing Yu's new life. How long would he spend looking for her? (COCA)

さらに、(17a) では瞬間的な行為の開始を表す副詞 *instantly* と共起することから準備段階における瞬間的な変化を表すこと、さらに結果段階における行為の過程を表すことが (17b) で行為の継続過程を表す副詞句 *Over lunch* と共起することからもわかる。

- (17) a. In a minute or two, he patted the small strip of mattress behind him, draped his other arm over his face and almost **instantly** fell to snoring. (COCA)
- b. **Over lunch** the neighbors fell to talking quite amicably. (COCA)

4.2.5 *set to Ving* の特徴

最後に、*set to Ving* では継続動詞が用いられる傾向が強く、状態動詞と共に起する傾向が弱いという特徴が見られた。また、(18a) のような文主語の意図が示唆される *eagerly* のような副詞と共に起するという特徴や、準備段階における瞬間的な変化を表すことが (18b) で時点副詞句 *At 6 p.m.* と共に起することからも確認できる。

- (18) a. BACK WHEN I was hired as an editor at a magazine, I was so thrilled to be there, so amazed to have a job in media at all, that I eagerly set to proofreading everything they put in front of me. (COCA)
- b. At 6 p.m., the soldiers set to preparing dinner in their modest kitchen -- peeling potatoes for french fries, boiling water for spaghetti, heating a toaster oven for warming breaded meat cutlets. (COCA)

5. 議論

5.1 状態動詞を好む理由

状態動詞と共起しやすい表現 *get to V* には *to* 不定詞が生起して「段階的な状態変化」を表すという意味特性が見られる。また、永続的な状態を表す動詞ではなく、一時的な状態を表す有限状態動詞 (吉川 1995: 159-160) が用いられる傾向が強い。さらに付け加えると、一時的な状態を表す動詞の中でもとりわけ本人にしかわからない知覚や精神活動を表す私的動詞 (Palmer 1974: 71) との意味的な結びつきが最も強い。

では、なぜ有限状態動詞は *get to V* に生起しやすいのか。それは、有限状態動詞が (19) のように進行形で用いると状態の段階的な推移を表わすという意味特性を持つことに起因する。

- (19) a. I'm hearing you **better** now. (吉川 1995: 159)
- b. It's mattering **less and less**.
- c. I'm gradually forgetting all the French I ever learnt at school.

さらに重要なのが、先行研究でも述べられていたように *to* 不定詞が「移行」の意味を表せることである。

この (i) *to* 不定詞の「移行」の意味と (ii) 状態動詞の持つ「段階的な状態の推移 (変化)」の意味、さらに (iii) *get to V* が段階的な状態変化を表せるという意味的な要因が3つ揃うからこそ、状態動詞と共起する傾向が強いものと考えられる。

また、前置詞 *to* も不定詞 *to* と同様に「移行」の意味を表せるため、*get to V* と同様に *get to V-ing* も段階的な変化を表せるし、*thinking, looking* などが心理的な状態「思う」や知覚状態「～に見える」を表す状態動詞として補文で用いられる例も観察できる。

5.2 状態動詞を嫌う理由

次に、起動表現 *get V-ing, fall to V-ing, set to V-ing* はなぜ状態動詞と共起する傾向が弱くなるのかを考えていく。

まず、これらの表現では共通して「段階的な状態変化」を表さない。実際に、*get V-ing* は実現段階における行為の開始点のみを表し、準備段階における変化は表さない。この *V-ing* の「準備段階を表さない」という特徴は、*get V-ing* に限って見られる現象ではなく、同じ起動動詞の中でも、現在分詞と統語的にも意味的にも類似の性質を持つとされる動名詞を従えた *begin V-ing, start V-ing* にも同様の特徴が見られることが 藏菌 (2015: 29) において指摘されている。

また、この「準備段階を表わさない」という特徴は、Verspoor (1996: 439) が主張する「同時性」と類似している。しかし、彼女の主張する「同時性」とは、動名詞を従える動詞に見られる特徴のことで、「主動詞で表される出来事」と「動名詞で表される出来事」とが同時に生起する現象を説明したものである。具体的に言うと、(20a) のように過去に実現された行為を表す場合はもちろん、(20b) のように潜在的な行為を表す場合でも、主動詞で表される *regret, considered* という行為を行う時、実は同時に動名詞で表される「メアリーと喧嘩した」「空手の指導員になる」という出来事のイメージが話し手の頭の中で想起(実現)されていると解釈することで、「実現された出来事」のみならず、一見すると「未実現の出来事」を表わす様な場面でも動名詞を用いることができると説明している。

- (20) a. I regret [the fact of] quarreling with Mary last year. (Wierzbicka 1988: 69)
 b. Hal considered [the possibility of] becoming a karate instructor.

では、なぜ彼女の主張する「主動詞で表される出来事と動名詞で表される出来事の同時的な生起」という現象が *to* 不定詞には見られず、*begin Ving, start Ving, get Ving* にのみ起こりうるのか。それは、動名詞・現在分詞が準備段階を経ずに出来事が始まる様子を表わすからであり、言い換えると、話し手・聞き手が「出来事が実現されるまでの準備の過程なしに物事が始まる」と認識するからに他ならない。

この「準備段階を表わさない」という意味特性をもつ *get Ving, begin Ving, start Ving* がそろって状態動詞と共起にくいことから考えると、*get Ving* が準備段階における段階的な状態変化の意味を表すことができないが故に、段階的な状態変化の意味特性を持つ状態動詞と共起しにくい傾向が生まれるものと考えられる。

また、*fall to Ving, set to Ving* は瞬間的な状態変化を表す。変化が瞬間的、つまり開始とほぼ同時に変化が終わって行為が実現されてしまう。このように表す変化の性質が異なるため、段階的な状態変化の意味特性を持つ状態動詞との結びつきが弱いと考えられる。

5.3 起動動詞の意味

5.3.1 *get* の意味と補文動詞

さらに詳しく補文動詞を見てみると、同じ起動動詞 *get* でも補文が異なると、その補文において用いる動詞の性質が異なる。補文動詞の選択基準について動詞 *get* の意味から考えてみると、*get* は (i) 段階的 (*gradually*) な開始や (ii) 実現 (*achieving*) するという意味を含意することが (21) に示した *COED*¹² の記述から確認できる。

- (21) a. begin to be or do something, especially gradually or by chance...
 b. succeed in attaining, achieving, or experiencing.

このことから、*get* が起動の意味(小西(編) 1980: 622) と共に過程を表わす性質、つまり段階的な意味を持っているので、移行の意味を持つ *to V* と共起することで、段階的な状態変化を表わすことができる。それ故に段階的な状態の推移を表わす有限状態動詞との意味的な結びつきが強くなり、*get to V* と共起しやすい傾向が生まれる。

また、*get to V* が類義表現である *come to V* に比べて、非状態的意味（内木場 2004: 66）や動作性（藏菌 2014: 64, 68）が強く感じられる理由は、*get to V* が表す準備段階における状態変化が完結的で、表される事象自体が動的な事象として認識されることに起因する。

さらに、実現の意味を持つ *get* が、移行の意味を持たない *V-ing* と共起すると、段階的な変化は表さず、出来事の実現（開始点）のみが表わされるため、時点的・瞬間的な行為を表わす瞬間動詞が共起しやすくなる。

そして、段階性（過程）の意味を表す *get* が、移行を表す *to* および実現段階における行為を表わす動名詞と共起することで、有限状態動詞のみならず継続動詞とも共起しやすい傾向が生まれる。

5.3.2 *fall* の意味と補文動詞

次に、*fall to V-ing* が瞬間的な状態変化を表し、継続動詞の中でも特に感情に関わる *argue, fight, quarrel* のような動詞と共起しやすい理由について考えてみる。

まず、小西（編）（1980: 533）が説明しているように、類義語の *drop* が突発性や速度に焦点を当てる動詞であるのに対して、*fall* はしばしば落ちていくという「運動の過程」に焦点を当てる動詞であることから、継続過程を表す継続動詞と共起しやすいと考えられる。

また、動詞 *fall* について *WNWD*⁹ では (22) のように「立場や名声、威厳などを失う」という意味が記述されている。威厳 (*dignity*) の意味を *RHD*² で引くと、「(人格・精神・心などの) 品位」を意味し、この「威厳を失う」という意味が影響するため *fall to V-ing* が *argue, fight, quarrel* などの品位を欠いた、平常心を失うような感情的な行為を表わす動詞と共起する傾向が強いと考えられる。

(22) to lose status, reputation, dignity, etc.

5.3.3 *set* の意味と補文動詞

最後に、*set to V-ing* が瞬間的な変化を表わし、補文において継続動詞を選択する傾向が強い理由を考えていく。

まず、*set* は (23a) に示す *WNWD*⁹ の記述にあるように前置詞 *out* などと共起して「移動の開始」を表わす。

また、*set on (to) V-ing* という表現は、元々 (23b) に示したように *Obs.* のラベルが見られるが、「物質的な移動」に限って用いられていたことも影響して、精神的な行為ではなく、物質的・身体的な行為を表わす動詞と共起しやすいと考えられる。

(23) a. to begin to move, travel, etc. (with *out, forth, on, off, or forward*)

b. with reference to physical movement, e.g. *set on going, set on packing*....

5.4 各起動表現の意味的差異の明示

最後に、本稿で確認してきた起動表現の意味的な差異について、意味素性を用いてまとめると表 3. のようになる。

まず、*get to V* は準備段階における「段階的変化」「完結的変化」及び実現段階における「行

為・状態の開始」を表す。その一方、*get Ving* は準備段階を表さず、実現段階における「行為の開始」のみを表す。

さらに *get to Ving* は準備段階における「段階的变化」を表し、さらに実現段階における動作継続も表す。一方で、*fall to Ving* は実現段階における動作継続を表すものの、準備段階で瞬間的变化を表すという点で異なる。また、*set to Ving* は準備段階で瞬間的变化を表し、実現段階における行為の開始までを表す。

表 3. 意味素性を用いた起動動詞の意味的な差異の提示

	準備段階			実現段階		
	瞬間的变化	段階的变化	完結的变化	開始	過程	終わり
<i>get to V</i>	—	+	+	+	—	—
<i>get Ving</i>	—	—	—	+	—	—
<i>get to Ving</i>	—	+	—	+	+	—
<i>fall to Ving</i>	+	—	—	+	+	—
<i>set to Ving</i>	+	—	—	+	—	—

5.5 起動動詞 *get, fall, set* が従える統語形式 *to V, Ving, to Ving* の関係性

最後に、起動動詞 *get, fall, set* がとる統語形式 *to V, Ving, to Ving* がどのような関係にあるのかを、コーパス調査で観察された統語的・意味的振る舞いを基にまとめた。

統語形式 *to V, Ving, to Ving* を俯瞰してみると、「準備段階における状態変化」を表す統語形式 *to V* と、「実現段階における行為の開始点」を表す統語形式 *Ving*、さらに「実現段階における行為の継続」を表すことができる統語形式 *to Ving* とに分けられる。

このことから、これら3つの統語形式と起動動詞 *get, fall, set* の意味とが影響し合うことで、それぞれが固有の意味的特徴及び統語的特徴を持ち、それぞれが補い合いながら「状態変化の開始」「行為の開始点」「継続的な行為の開始」という3つのタイプの出来事の開始を表わしていることがわかる。

6. 結論

本稿では、まず、各起動表現が「準備段階及び実現段階を表すかどうか」について議論してきた。その結果、*to* を持つ表現 *get to V, get to Ving, fall to Ving, set to Ving* に関しては準備段階における変化を表すという一般化が可能であることを明らかにした。

次に、「特定の意味の動詞が補文で用いられる理由」について議論した。その結果、*to* を従える起動表現の中でも段階的变化を表す表現のみ、推移的な状態変化を表すことができる状態動詞と意味的な共通性を持つため、状態動詞と共起する傾向が強いことを主張した。その一方、瞬間的变化を表す *fall to Ving, set to Ving* や準備段階における変化を表さない *get Ving* では状態動詞が用いられにくいことを主張した。

さらに、起動表現それぞれが特定のコロケーションを形成する要因については、(i) *get* の持つ「段階性」「到達」の意味 (ii) *fall* の持つ「運動の過程・威厳を失う」の意味 (iii) *set* の持つ「物質的な移動」の意味と、(iv) *to* 不定詞の持つ「移行」の意味及び (v) 動名詞と現在分詞の持つ「同時性(非移行)」の意味が関係しあって共起しやすい後続動詞、つまり動詞コロケーションを決定していることを主張した。

最後に、「統語形式 *to V, V-ing, to V-ing* の関係性」について議論した。まず、*get to V, get to V-ing* がそれぞれ「(to) V, (to) V-ing」において表される出来事の実現に至るまでの状態変化」を表現すること、次に *get V-ing* が行為の開始点を表現し、最後に *get V-ing* では表しきれない実現段階における継続的な行為を *get to V-ing, fall to V-ing* が表わすことで、「準備段階」「開始点」「実現段階」という3タイプの出来事の開始を、起動表現それぞれが補い合いながら表わす関係にあることを主張した。

Notes.

1. 本稿でいう実現段階については、Verspoor (1996: 439) の説明の中でも、特に動名詞が持つとされる性質である「同時性」の説明を参考に定義した。
2. Vendler (1967) や Dowty (1991) において達成動詞(行為の「過程」と「終了」を表す動詞)を他と判別するために用いられる統語テストである。
3. 八木・井上 (2013: 125-126) が示す統語的な特徴を基に、動詞 *think* を状態動詞と動作動詞とに判別している。
4. 表中の *get to be, know* の数値は、それぞれの用例の総数 1448 例, 969 例の中から、それぞれ任意に 800 例, 500 例を抽出し、その中でも起動の意味で使用されている用例の数を記載している。

7. 参考文献

- Close, R. A. (1962). *English as a Foreign Language: Grammar and Syntax for Teachers and Advanced Students*. London: G. Allen & Unwin.
- Curme, G. O. (1931). *Syntax*. Boston: D.C. Heath.
- Bolinger, D. (1968). "Entailment and the Meaning of Structures." *Glossa* 2, 119-127.
- Brinton, L. (1988). *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and Post-Verbal Particles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dowty, D. (1991). *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Duffley, P. J. (2012). *The English Gerund-Participle: A Comparison with the Infinitive*. New York: P. Lang.
- Freed, A. (1979). *The Semantics of English Aspectual Complementation*. Dordrecht: Reidel.
- Hornby, A. S. (1975). *A Guide to Patterns and Usage in English* (2nd ed.). London: Oxford University Press.
- Jespersen, O. (1940). *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part V Syntax, Vol. 4*. London: Allen & Unwin.
- Kimball, J. (1973). "Get." In J. P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics 2*. New York: Academic Press. 205-215.

- Kiparsky, P. and C. Kiparsky. (1971). "Fact." In D. Steinberg and L. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press. 345–369.
- Leech, G. and J. Svartvik. (1994). *A Communicative Grammar of English* (2nd ed.). London: Longman.
- Palmer, F. R. (1974). *The English Verb* (2nd ed.). London: Longman.
- Poutsma, H. (1929). *A Grammar of Late Modern English, Part I, The Sentence, 2nd half The Composite Sentence* (2nd ed.). Groningen: P. Noordhoff.
- Rudanko, M. J. (1996). *Prepositions and Complement Clauses: A Syntactic and Semantic Study of Verbs Governing Prepositions and Complement Clauses in Present-Day English*. Albany: State University of New York Press.
- Trotter, P. (1949). "Inchoative Verbs," *English Language Teaching* 3 (4), 96-100.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Verspoor, M. (1996). "The Story of -Ing: A Subjective Perspective." In M. Pütz and R. Driven (eds.), *The Construal of Space in Language and Thought*. Berlin: Mouton de Gruyter, 417-454.
- Visser, F. Th. (1972). *An Historical Syntax of the English Language, Vol. II*. Leiden: E. J. Brill.
- Wierzbicka, A. (1988). *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Wood, F. T. (1967). *English Verbal Idioms*. London: Macmillan.
- 内木場努. (2004). 『「こだわり」の英語語法研究』東京：開拓社.
- 柏野健次. (1999). 『テンスとアスペクトの語法』東京：開拓社.
- 柏野健次. (2012). 『英語語法詳解：英語語法学の確立へ向けて』東京：三省堂.
- 藏菌和也. (2014). 「連鎖動詞 come to と get to の意味と統語に関する研究」『THE JASEC BULLETIN』第 23 巻第 1 号, 59-69. 日本英語コミュニケーション学会.
- 藏菌和也. (2015). 「起動動詞 begin, start に後続する to 不定詞と動名詞の選択基準」『英語語法文法学会第 23 回大会予稿集』24-31. 英語語法文法学会.
- 小西友七(編). (1980). 『英語基本動詞辞典』東京：研究社.
- 小西友七(編). (2006). 『現代英語語法辞典』東京：三省堂.
- 八木克正・井上亜依. (2013). 『英語定型表現研究：歴史・方法・実践』東京：開拓社.
- 吉川千鶴子. (1995). 『日英比較動詞の文法：発想の違いから見た日本語と英語の構造』東京：くろしお出版.

コーパスの略号

BNC : The British National Corpus. (SKE_BNC を利用した。)

COCA : The Corpus of Contemporary American English. (2016 年 4 月時点)

辞書の略号

- CALD*³ : *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (3rd ed). (2008). Cambridge: Cambridge University Press.
- COB*⁷ : *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English* (7th ed.). (2012). Boston: National Geographic Learning.
- COED*¹² : *Concise Oxford English Dictionary* (12th ed.). (2011). Oxford: Oxford University Press.
- LAAD*² : *Longman Advanced American Dictionary* (2nd ed.). (2007). Longman: Pearson Education.
- LDCE*⁵ : *Longman Dictionary of Contemporary English* (5th ed.). (2009). Harlow: Longman.
- LDCE*⁶ : *Longman Dictionary of Contemporary English* (6th ed.). (2016). Harlow: Longman.
- MED*² : *Macmillan English Dictionary: for Advanced Learners* (2nd ed). (2007). Oxford: Macmillan Education.
- OALD*⁹ : *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (9th ed.). (2015). Oxford: Oxford University Press.
- OED Online : *Oxford English Dictionary Online*. (2016年4月時点)
- WNWD*³ : *Webster's New World Dictionary of American English* (3rd college ed.). (1994). New York: Prentice Hall.
- RHD*² : 『小学館ランダムハウス英和大辞典第2版』(1994). 東京: 小学館.